

林富士馬

詩人と風景



東書選書



# 詩人と風景

林富士馬



東書選書12

詩人と風景

昭和五十二年十月二十四日第一刷発行

定価 八九〇円

著者 林 富士馬

発行者 鈴木和夫

発行所 東京書籍株式会社

東京都台東区台東一―五―十八 丁二〇

---

印刷・製本 図書印刷株式会社

© Fujima Hayashi, Printed in Japan 1977  
乱丁・落丁の場合はお取替いたします 0392-599012-5313

目  
次

序に代えて(詩への誘い)……5

## 伊良子清白……11

I 志摩、安乗……12

II 小浜の診療所……22

III 漂泊……35

## 中 勘助……47

## 立原道造……73

I 盛岡 十月十九日……74

II 信濃追分 昭和四十四年……86

III 参考書……107

中原中也……111

I その故郷……112

II 覚え書、ノート……125

伊東静雄……141

I 詩人の生涯……142

II 「菜の花忌」昭和四十六年三月……180

萩原朔太郎……189

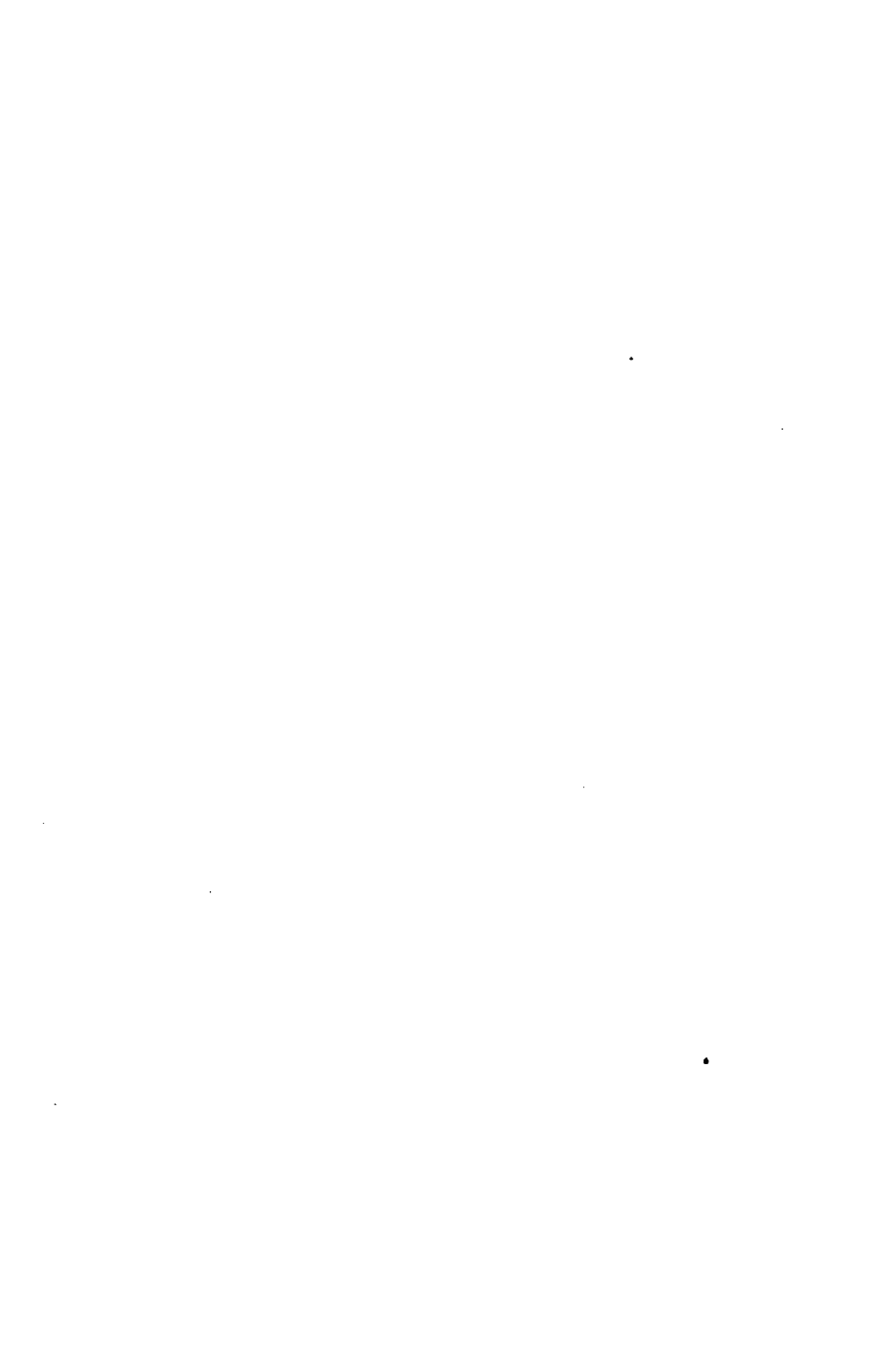
佐藤春夫……207

I 俳諧の人、佐藤春夫……208

II 『殉情詩集』と『我が一九二二年』について……216

あと書……234

装幀・勝井三雄



## 序に代えて（詩への誘い）

かく誘ふものの何であらうとも

私たちの内の

誘はるる清らかさを私は信ずる

伊東静雄

この一冊の書物の下書きが、一応終わったところで、急に奥志摩の安乗に行ってみたくなくなった。伊良子清白について書いたとき、安乗という土地に、まだ行ったことはなかったのだ。

詩と詩人について考えるとき、具体的に、詩人の作品と、その詩人の生涯にぶつかってみるより他に方法を知らない。

平素から、自分ひとりには、勝手に馴染みになっていた「詩」と、その作者たちということ、つまり「私の詩人たち」ということで、一冊の書物にまとめてみたら、伊良子清白、中勘助、立原道造、中原中也、伊東静雄、萩原朔太郎、佐藤春夫の七名になったのは、我々の文学史のなか



で、当然触れなければならぬ他の重要な詩人たちがいるのだから、偶然の結果ということになる。「私の詩人」ということで、好きなように書いていたら、ちょうど、この七名で、一冊の書物にふさわしい厚さ（枚数）になったのである。

ほんとうは、詩人なら、誰でもよかったのである。が、私自身にとって、この人たちについて書くのに、改めて、新しく書物を読む必要などは、全くなかったので、私に最も身近な、馴染みの深いままに、この七人の詩人たちについての文章になった。

偶然、ここに取りあげた七人の詩人たちについていえば、伊良子清白ひとりをのぞき、他の詩人たちについては、それぞれ完備された個人全集が、それも一度ならず刊行されており、安易な入門書を書くにしても、少し親切に書こうと思えば、それぞれ、一冊ずつの書物の必要な詩人ばかりである。おびただしい資料に、むしろ悩まされる詩人ばかりである。もっとも、私は、これらの詩人の解説書や、鑑賞の書物を書く気持は少しもなかった。たまたま、ここに取りあげた詩人たちを通して、私は、ついに私の一生が、それにかかざらってきた「詩への思い」を述べれば足りた。が、はじめてこれらの詩人と、その詩作品とに接するだろう若い人々のことを念頭に置き、それなりに心がけたところはあった。

まず、現在が敗戦後、既に三十二年、いつの間にか、三十年が経ってしまったということである。仏教でいえば、地上の生活の一応の区切り、三十三回忌にあたる。

明日のことを考える暇もなく、敗戦と、戦後を迎えた私たちは、ただ毎日毎日、その敗戦と戦

後という現実を追っかけられて、いつの間にか、三十年経ってしまったというこの現実を、否応なく、痛感せざるを得ない。しかし、敗戦後に生まれたおおかたの人々は——現在、日本に生存している半数近くの人々は、その敗戦というものがどんなものであったか、書物で読んだり聞かされたりするだけで、肉体的には知らない人々である。

私は、戦争と敗戦時の悲惨とを、ひとに語る気はしないが、忘れることはできない。それが歴史というものである。

私はこの書物を書くことで、たぶん、自分自身のために、この「三十二年」を確かめてみたかったに違いない。

私たちが普通「詩」と呼んでいる文学形態は、一応、明治十五年八月、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎という、いずれも西洋の学問を学んだ新進の知識人たちによって上梓された「新体詩抄」という表題の書物から出発したとされている。それまでは、「詩」といえば「漢詩」のことであった。

「明治ノ歌ハ明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ。日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ」

外山正一も矢田部良吉も井上哲次郎も鋭敏な新進の学者であり、真面目な教育者であり、明治の精神の一面であった啓蒙家として、悠久な文学の考え方からしたら幼稚といわなければならぬかもしれないが、とにかく、明治の大変革から十五年経って、はじめて明治の新しい文学意識とし

て、『新体詩抄』が生まれているのである。

敗戦後三十二年、戦後のいわゆる民主主義などと称されたものから、はたしてなにが生まれているのであろうか。文学などというものは、せめて五十年くらいを極小の単位にしなくては、ほんとうの評価などできるはずがないことはわかっているにしても、やはり考えてみたいことがあまりに多い。

これもまた、一応の下書きが終わったところで、はっきりと自分自身にわかったことであるが、例えば、佐藤春夫の文学と紀州熊野の風景、風土と切り離せないように、立原道造とその作品とは、彼が東京の下町生まれであることと切り離すわけにはゆかないであろう。当然といえば当然のことなのかもしれないことが、私には新鮮な驚きであった。

萩原朔太郎の、今日でもなお依然として、斬新なものに思える『月に吠える』『青猫』は、彼の故郷、前橋で完成され、発売されたのが東都だったという事実である。

伊東静雄は、その生涯をほとんど大阪で暮し、そこで死んだ人であったが、その作品は、彼の故郷諫早と切り離せないし、中原中也の文学を考えたとき、私にとっては、彼が徹頭徹尾、明治維新における長州人を思い起こさせるところが、なんとも興味深かった。

理屈として、「詩人とその故郷」とか「詩人とその風土」などということを私がいいたいのではない。誤解してもらいたくない。自然に、そうなっている事実を、私は面白いことだったとい

うのである。

佐藤春夫のある伝記作者が、その人生の危機と転機るときには、いつでも帰省している事実に気づき、全く奇異なこととしているが、佐藤春夫にかぎらず、芭蕉の伝記がそうであったように、本来、詩人の生涯をたどっていると、自然とそうなっている事実を驚く。佐藤春夫が散文の作品を試み、あんな風に苦心して、なかなかまとめることのできなかつた「病める薔薇」(田園の憂鬱)、その処女作であり、出世作をようやく完稿したのも、その「故郷」においてであった。

伊良子清白の「漂泊」と「安乗の稚児」とは、彼の代表作として、どんな詞華集アンソロジーにも必ず取り上げられているが、今度、伊良子清白の伝記をはじめて調べ、その生涯が「漂泊」にうたわれているのとそっくりおなじように、彼が独特の形で「漂泊者」であることを知り、改めて驚いたことであった。

「安乗の稚児」は、明治三十八年、二十九歳の清白が、医科の学生として、このあたりに遊び、その時のことをうたったのであるが、それから十七年後、その近くの漁村の村雇いの医者として、また、小学校の校医として、そこを「ふるさと」とし、約二十三年間近くを暮すことになる。

私は、この眼で、その風景をながめてみたくなった。

「安乗」という地名は、その字音が珍しく、また面白く、誰だって、一度、眼にしたら忘れっこはないだろうと思う。私にも、釈迦空の名前とともに、ずいぶん前から、その地名についての記憶があった。

志摩半島が充分に近代化され、観光地となり、既に昔のおもかげなど、あるべくもないだろうことは、当然のことながら、容易に想像できた。むしろ、戦争中、及び戦後とはまた意味の違った荒廃、現代というこの荒廃こそ、この眼で確かめてみたことかもしれない。

あらゆる詩人が、同時に、「時代の児」であったことについては、改めていうまでもあるまい。しかし、詩人の「時代風潮」「時代背景」を知るのは、書物などを通してでなければ不可能であるのに対し、とにかく、「詩人の風景」は、この眼で、確かめることができる。それがどんなに変貌していようと、かえって、同時に、そこに「時代」を、その詩人の眼を通して知ることができる。

安乗は志摩半島の中ほど、北の菅崎とともに深くの矢湾をかかえ、東北に細長く突出している。私は、その志摩半島の安乗に行き、それから大王崎の尖端に立って、ただ波濤が岩々にくだけ散るところを、その風景をながめてくれば、それでよかった。

自分の目で確かめるのは、それだけでよく、私の文章に、或は、引用が多いのを批難する人があっても、私は文学的世界、自己、体を重んずるのである。

昭和五十二年というときの初夏

林 富士馬

しるす

伊良子清白



安 乘 崎

## I 志摩、安乗

小説家の庄野潤三に「詩三つ」という文章がある。

「鷗外のへうた日記」の初めの方に出て来る「へねぎごと」という詩に、

歌をよく 聞かんとやする

よしさらば 汝ななに告げてん

ひと時に ひと歌を見よ

わすれても ふたつな見そね

とある。

自分の好きな詩歌を挙げるのには、どうすればいいのか。好きなものの中から、また更にどれかを選ぶのは、難しいというよりも、もともと無理なことであるのに気が附く。

鷗外の教えるように、へひと時にひと歌が、いいと分っていても、とてもそうはゆかない。それで、思い浮んだものをするすことにした」

と、もう二十五年も前に、伊東静雄に教わったという伊良子清白の「安乗の稚児」と、次に、伊

東静雄の詩から二つを挙げてゐる。

この文章は昭和四十四年十一月号の「新潮」に発表されたものである。さて、その伊良子清白の「安乗の稚児」というのは、次のような作品である。

### 安乗の稚児

志摩の果安乗の小村  
早手風岩をどよもし  
柳道木々を根こじて  
虚空飛ぶ断れの細葉

水底の泥を逆上げ  
かきにごす海の病  
そゝり立つ波の大鋸  
過げとこそ船をまつらめ

とある家に飯蒸かへり



男もあらず女も出で歩いて  
稚子ひとり小籠に座り  
ほゝゑみて海に對へり

荒壁の小家一村  
反響する心と心  
稚子ひとり恐怖を知らず  
ほゝゑみて海に對へり

いみじくも貴き景色  
今もなほ胸にぞ跳る  
少くして人と行きたる  
志摩のはて安乗の小村

詩として、まず書いておかなければならぬことは、伊良子清白のこの「安乗の稚児」をここに引用するのに、こまかいところで、例えば、中央公論社の『日本の詩歌』の第二十六卷『近代詩集』から引用するにしても、筑摩書房『現代日本文学大系』のなかの第十二卷から引用するにし